

「地にねざす絵画」

ゲスト：藤原顕太（芸術文化コーディネーター、社会福祉士）

藤原 クロスプレイ東松山は、高齢者福祉施設にアーティストが滞在宿泊して、利用者と職員と文化的な交流を図るプロジェクトです。「デイサービス楽らく」の運営をしている医療法人社団保順会と、アートマネージャーの集まりである一般社団法人ベンチが共同で2022年から行っています。福祉施設のプロジェクトは近年増えていて、一般的にはアーティストが先生になってワークショップをやる人が多いんですけど、この場合、アーティストは先生ではなく、デイサービスのなかで、ただそこにいる、というところからスタートします。デイサービスの利用者はレクリエーションをしたり、食事をしたりという一日の流れがあって、ところどころでアーティストと利用者の時間が重なる感じです。アーティストの招聘は、依頼型と応募型のパターンがあって、3年間で16人の方に来ていただいています。大事にしているのは、アーティストの役割はサービスを提供する人ではないということです。デイサービスは、職員が工夫してレクリエーションなどをやっていて、プログラムがすごく充実しているんです。だからアーティストに代わりに何かをやってほしいということではないんです。アーティストも自分の役割は何だろうと悩むんですけど、この人の話をもっと聞いてみたいとか、関わっていききたいと感じて、そこから作品につながる人が多いです。ケアの現場にとっては、アートをやることよりも、アーティストがいることで見えてくるものがたくさんあるという点を重要視しています。職員とアーティストの目的は違っても、それぞれの過程で協力していけるポイントがあって、それを考えながらつないでいくのがコーディネーターである私たちの役割です。地域のなかで、高齢になっても人が文化的に生きていけるような場づくりをしていきたいという思いがあります。福祉施設の価値観が、閉じたルールや社会になってしまっただけで煮詰まるのではなく、外から来た人が入ることで空間が開かれていく、文化的な出会いの場を目標したいと思っています。

大平 私は日本画を学んで、一人で絵を描いてきたんですけど、大分県別府市にあるアートNPOのBEPPU PROJECTが運営している共同シェアアトリエに住んだことから、地域と関わりながら作品をつくるようになりました。最初はアパート近くの温泉に絵を描いてほしいと依頼されて壁画を描きました。それから福祉施設、幼稚園、学童保育、いろんな場所でワークショップをするようになりました。一番長く通ったところで3年ぐらいい、毎月のように活動していました。1回のワークショップで関係が終わるのではなくて、定期的に通って、参加者やスタッフの顔も覚えて、その人から出てくる表現もわかるようになってきたので、次はこういうことをやってみようとか、回数を重ねることで、できることが広がっていきました。ワークショップはだいたい1～2時間ですが、たくさんさんのドラマがあると思いました。私にとってワークショップは舞台公演のような感覚があります。私は指揮者で、参加者やスタッフの人も出演者という感覚。道具を準備するまでが私の仕事で、どういう反応があるかと、いつも見えています。ワークショップは時間の芸術だと思います。でも、この時間だけで完結してしまうのがもったいないと思っていたときに、熊本県のつなぎ美術館で滞在制作をしました。そのときは4ヵ月で、町の文化祭に屋台を出したり、老人ホームに行ったりしてワークショップを行い、その時間にできたものをひとつの画面に融合させて作品をつくりました。私は地元が岐阜県なので、岐阜県美術館や母校の小学校でもワークショップをして作品をつくりました。参加者が心の赴くままに描いたものを、自分がどう作品にするかと考えながら描いています。今回の展示は、初めて川越に来て実際に歩いた道や、出会った建物を感じさせる作品になっています。一番大きい樹の作品は、皆さんがシールを貼って、3ヵ月の会期にだんだん変

化していく作品になっています。絵を展示するだけでなく、関わりを増やすことで、能動的に絵とコミュニケーションするような方法ができたらいいなと思っています。私がいろいろな場所で滞在制作をして思うのは、アートに関心のある人よりも、関心がない人の方が圧倒的に多くて、美術館に足を運ばない人が多いことです。私はアートの手が届きにくいところこそ、想像力などのアートの力が必要じゃないかと思っています。そういった意味で、アートを目的としていない人との接点の増やし方はすごく大切だなと思っています、NANAWATAやクロスプレイ東松山の活動に可能性を感じています。

藤原 トークの打ち合わせで、展示がはじまってすぐに来たとき、まさかこの樹の絵にシールを貼るとは、という感じで結構ドキドキしたんですね。そのときはまだ葉っぱもなかったし、自分がどこに貼るのか、好きに貼っていいんだろとか、戸惑いながら貼りました。でもだんだん葉や花が増えていくと、自分の貼った1点を他の人も受けとめながら増やしていったんだと感じたんです。自分一人ではなく、誰かに絵に介入してもらうことの面白さを知ったきっかけはあったのでしょうか。

大平 これ、というきっかけはないかもしれないです。ただ、普通に生活していく上でアートに関心がない人が圧倒的に多いと感じたことはあります。いくら自分が制作しても、一方的なコミュニケーションになってしまうと感じることも、たびたびあって。私は美術館ではない場所で作品を発表する機会が結構あったんですけど、そういった場所に行くたびに、美術館はちょっと行きにくい、と言われる。だからワークショップに参加してもらって、参加した作品が来月美術館で展示されますよ、と言うと、行くきっかけになるかなとか。つなぎ美術館で個展をしたときは、老人ホームの方がワークショップに参加してくださったので、90歳を超えているおばあちゃんが、ずっと町にいて初めて美術館に来た、ということもありました。そういうきっかけのアクションのひとつになればいいなと思って、こういった関わりを増やすことをしてます。

藤原 大平さんにとっては個人制作と共同制作の両方が並行している感じなんですか。アートプロジェクトで何かをつくるだけでなく、作品をつくって販売していくだけでもなくて、その両方の組み合わせで活動されているようなイメージですが。

大平 自分のなかでいろんな表現方法があって。ワークショップだけしてくださいと言われることもありますし、そこで完結してしまうこともあるんですけど、そのたびに相談しながらという感じですかね。個人の意見だけでできるわけでもないの。

藤原 いろんな場所で滞在制作をしていますけど、こういうことをやってほしいと依頼があることが多いんですか。それとも、まず現地に行って何ができるかを考えるんですか。

大平 福祉施設では先生として期待されて呼ばれて、販売しやすい絵、展示しやすいきれいな絵を描けるようにしてほしいと言われることが多いです。でも私のワークショップは、相手がどういうふうに反応するかを大事にして、あまり今日はこうしましようとは言わないので、自分も共にいることで生まれる関係性のなかで制作をやっていたのかもしれないと思いながら、お話を伺っていました。

藤原 相手がいる場所ですからね。しかもその相手は、アーティストを先生として教えてくれるのを待っているわけではない。福祉施設のように描くための場所ではないところに行ったときは、まず大平さんがどういう人なのかを知ってもらって、隣人となってからコミュニケーションのツールとして絵を使っていくのかもしれないという気はしますね。

大平 そうですね。私が福祉施設に行くときに思うのは、利用者や参加者に向けてというより、スタッフや職員に参加してもらいたいということです。私たちはいつも現場にいるわけではなくて、いわゆるハレの日とか——ハレの日はいつも続くわけじゃないし、すごく特別なことをしているわけではないので、絵具を使うとか、描き方を変えてみるとか、スタッフや職員の方にプレゼンしている面もありますね。

藤原 私も障害福祉の世界にいて、何年か障害のある人の芸術活動支援の仕事をしていたことがあるんですけど、描かせてしまうタイプの支援を行う人もいれば、素材だけを最初に揃えておくような——決してほったらかしではなく、指導はしないという意味ですね——まず関心を持ってもらるところからスタートする支援者もいて。そこで結構、現場のクオリティが変わってくる実感はあって。大平さんが行かれるときは、現場に行ってみて、ようやく状況がわかるころもあると思うので、その点では、スタッフさんに向けたプレゼンテーションになるのかなという気もするんですよね。

大平 そうかもしれないですね。

藤原 滞在制作、特に福祉施設に行くなかで、大平さんにとって一番おもしろいと感じるのはどういう部分ですか。

大平 絵は一人で描いた方が簡単なんです。自分が思うように全部描けばいいので。でも、いろんな人が関わってくれることによって、自分では出てこない形や使わない色がいっぱい出てくる。自分の絵なんだけど、自分の絵じゃない。自分の想像を超えた作品が出てくるのがすごく面白いと思っているので、私の絵というより、私たちの絵という言い方を最近はしています。

藤原 一方的でなく、私たち、と相手にも思ってもらえるような形でつくっていくことはすごく大事だと思います。参加しやすさの窓を広げることとか、考えながら模索されているのかなという気がします。

大平 私は、否定しないことを大切にしています。この色を使って描きましょうとか、ここで止めましょうとか、この色を使った方がいいとか、描かせることが多い。でも、それでできた作品は誰のものか。一見きれいというか、見やすいのかもしれないですけど、描いた本人の心持ちはどうなのかな、というのを目の当たりにすることがあって。なので、道具を揃えるまでが私の仕事と思っていて。たとえば、今日は赤っぽい色が加わるといいかなとか、ハサミを出すタイミングは後の方がいいかなとか、ちょっと調整することはあるんですけど、基本的に自分を表現する時間は日常ではそれほど多くないので、そうした時間を大切にできればいいなと思っています。

藤原 ワークショップを舞台公演と思っていると聞いて、すごいなと思ったんですけど、確かに、あるタイミングで何かを足すことによって、全体の流れが変化する影響を与えていくところは演出という感じがします。一人の作品ではないから、自分で完全にコントロールすることはありえない。全体を主導していくことは手放して、みんなにどんどん進めてもらいながら、その中で調整するところを意識して作品をつくっていく。そういう協同関係なのかなという気がしました。

大平 ときどき、これどうしようかなということもあるんですけど、参加してくれた方の心の動きを汲んで、どう見せていくかは、自分の作家性、腕の見せどころだと思っているので。そういうものを排除してしまうんだったら自分で描けばいいだけの話なので。こうした制作をする以上は、作品として昇華できるやり方をいつも考えています。

藤原 大平さんはいろいろな場所で滞在制作をされていますけど、滞在先に行くときの動機はあるんですか。

大平 呼ばれれば（笑）。自分が絵を描いているので、やっぱりこれまでアートに関心がある人といっしょにいる割合が多かったんです。でも、まったく美術館に行ったことがないとか、絵はよくわからん、現代アート何それ、という人の感想の方がストレートで、気がつくことがあったりして、そういった人と関わって作品をつくったときの方が驚いていたことが多かったので、やりがいは感じますね。

藤原 違うからこそ、出会って何かが生まれたときの喜びとか面白さがあるのかも知れないですね。

大平 そうかも知れないですね。

藤原 今までで一番滞在で長かったのが、つなぎ美術館。滞在だけではなく、住むことまで考えたのは、地域の魅力に惹かれていった感じですか。

大平 津奈木町には4ヵ月滞在した後に3年住みました。町の人口が4000人ぐらいで、人口の多くが後期高齢者と言われている場所です。出てくる言葉が自然というか、私にとっては新鮮で、もちろん美術館に行ったことのない人はいっぱいいたんですけど、町を好きな人が多かったですし、何でも楽しむ性質の人が多かったので、共同でやりやすかった。人口が少ないのもあって、皆さん、顔がわかる距離感なんですよ。誰々の同級生のきょうだいとか、みんなつながって大きい家族みたいな感じだったので、何かやろうと思ったときにすぐできる環境でした。

藤原 数年住んで、ただのプロジェクトではなく何かをつくっていくことになったときには、事前に招聘する側から用意されているものだけではない関係づくりとか、新しくゼロからつくっていくものも、きっと多いんだろうなと思います。

大平 そうですね。

藤原 最初のきっかけとしては作品を依頼されることが多いと思うんですけど、それだけの長さのレジデンスでは、どこにいるか、時間だったり、人や場所と出会ったりすることから作品をつくる必然性が生まれてくるという気もするんです。

大平 そうですね。いろんな場所に滞在させてもらって思うのは、私が行くことで、いろんな人の「はてなマーク」を増やしたい。なんだ、これ、みたいなのが増えていくことが、他者を想像する力やエネルギーにつながっていく。そういうアートの力をいつも信じて、いろんな場所に行ってますね。

藤原 活動自体が問いかけになっている。たとえばアートは知らん、みたいな人がいたときに、でも、その人とのやりとりの中で何か問いかけが生まれるということですかね。

大平 漁師さんとか、アートはまったく、何それ、という感じだったので、最初は人として出会っていくんですよ。作品に会うのが最後だったりするので。人間として、どういうふうに見られるかといつも思っていて。滞在制作が終わって展示がはじまったときに、本当に画家だったんだね、と言われることが結構多くて。画家として場所に入っていくのではなくて、人として入っていくことを、いつも心がけています。作品に出会ってもらうまでの距離が遠いので、いろんな場所で展示するときに、地域のイベントに顔を出したりして、まず私に出会ってもらうことによって接点を増やすようにしていますね。

藤原 作品がつくり出されていくまでの期間はどれくらいかけているんでしょう。

大平 最初にリサーチというか、いろんな人に会って、交流からはじまる。日中は交流して、夜に黙々と描くパターンになりがちですね。あそこの景色いいよって言われたら、そこに行って描いたり、誰かの思い出があったら、そこに行って、その体験を描いたり。場所から何かをもらえることもあるんですけども、人からももらえることもいっぱいあると思っています。

藤原 ひとつひとつの作品のイメージを育てながらつくることと、他人に介入してもらってつくることの両方が、だんだん一緒にまわってくるみたいな感覚なんですか。

大平 展示だけでもいいんですけど、観るだけだと一瞬で、好き嫌いの反応も一瞬だと思うことがあって。素通りされることもあるし。鑑賞だけでなく、参加するアクションがあることで、興味を持ってくれる方法を増やしている感じですね。

藤原 今回の作品も含め、場所に根ざす壁画は、プロジェクトとして一度限りになってしまっ、他の場所で見せたり、文脈から切り離して見せたりということは難しいんですか。

大平 基本的に滞在制作はその場所ありきです。今回の作品も、ここだけの展示を想定している感じですね。他所に持って行って見てもらえたらいいんですけど、この絵はここにあるためのランドアートというか。この期間、この場所だけのものかなという感じではありますね。

藤原 その場所で。そこにいる人たちの間でできているものということを大事にされているんですね。

大平 そうですね。

（まとめ：岡村幸宣）